

存在－丸山雅秋の彫刻

丸山雅秋の彫刻には、観る者を引き付ける重力のようなものが内在する。本展出品作品から一見直方体に見えるブロンズの彫刻をみる。大きくはないその彫刻にとらわれた視線は、表面を移動し、有機的でやわらかな面を発見する。それぞれの面は僅かに傾き、浮かび、時に重力に抗うように彫刻を構成し、面と面がつくる線は静かに全体を定義している。出品作品の多くを占めるのは、そのような一見幾何学的形態をしたブロンズの彫刻で、2000年以降に制作された丸山の主要な作品群である。弧形や直方体の表面にある、はじめからそこにあったかのような溝や孔、僅かなずれを暗示する段差や、折れ曲がった柱状体、複数の形態による構成など彫刻を取り囲む空間との関係が静かに生まれている。丸山は具象的な人体彫刻を制作していたが、存在の本質を追求し、形態は単純化していく。他の作品とは異質な半抽象の人体像《座る女》では、人体の各部分が幾何学的形態に還元され再構成されている。具象から抽象への変容と直方体の作品にみた有機的でやわらかな面を想起させる作品であり、後の作品が孵化する蛹のようでもある。また、本展には平面作品が出品される。彫刻家が描く平面作品といえ、彫刻作品を構想するためのエスキースを想像するかもしれないが、丸山は描かれる媒体（出品作品では紙）そのものをどう表現するかを考えて制作している。主に墨で描かれ、紙との関係から生まれるにじみやかすれ、濃淡や余白が意図され、豊かな絵画空間を生み出している。彫刻の表面は傷、色の変化、凹凸、手の痕跡が認められ、時間が封じ込められているかのような複雑な様相をみせる。それがブロンズという媒体の表現だと考えると、その表面性において平面作品と彫刻作品は同じ地平にある独立した作品といえる。

丸山は1952年、長野県豊科町（現安曇野市）に生まれ、東京造形大学彫刻科で佐藤忠良に師事した。佐藤はシベリア抑留を経て帰国し、市井のまじめな無骨ともいえる「群馬の人」を制作する。過酷な抑留生活の中でほんとうに付き合える人はふつうの人であることを実感的にわかったからだという。（1）それは、日本人によって、初めて日本人の顔を表した彫刻作品となった。丸山はそれまでの自分の表現を壊し、新しい表現を探求するためにイタリアに渡る。イタリア国立ミラノ・ブレラ美術アカデミー彫刻科で4年間学ぶなかで日本の文化を見直す必要に駆られ卒論では能を取りあげている。現在も「能の表現方法は、大変基本的なテーマを、役者に二重の不自由を課す（男性が優雅な女性の役をするうえで堅い能衣装を着て演技する）ことで行動の制約を課し、表現方法をシンプルで要素だけを取り出さざるを得ない方法をとっている、また舞台上の役者の数を最小限にしシテ（主役）の存在を強く打ち出し、同時にその空間を鮮烈に打ち出す。」（2）とし、それは彫刻の表現方法に繋がることに言及している。丸山にとってイタリアでの日本文化の再考察が現在の制作の核になっている点は、佐藤にとっ

での日本人の再発見と重なる。彫刻について佐藤は「いい形には作用と反作用が働いている。」(3)といている。彫刻が10の力で地を押すと、地が10の力で押し返すこと、それが彫刻が「立つ」ことであるという丸山の理解に繋がる。さらに、「作品が表す基本的な力の軸や方向に対して、どこかにそれに反したり違ったりする軸や方向が見られると、その作品は微妙な均衡を保って美しく感じられる。」(4)という。この微妙な均衡は丸山の作品にも見られ、佐藤との表現の違いを超えたところで本質的な共通点を見つけることができる。ブレラ美術アカデミー在学中よりミラノでグループ展に出品、卒業後、イタリアの市立美術館、ドイツの市立ギャラリーで個展を開催、その後、ドイツ・シュツットガルトで8年を過ごし、同国内で数々の展覧会に出品している。イルムトラウド・シャールシュミット=リヒター（美術評論家）は「日本の文化は西洋的視点からすれば、まったく異質で、そのプライオリティーはまったく別種のものである。醸し出される雰囲気や情感、さらにまた、形態や表面の調和、これらへの研ぎ澄まされた感受性にその特徴を見ることができ、そこには諸力の緊張関係から生まれるバランスが保たれている。それも、このバランスは精神的なものの表現にさえるのである。これこそ、現代でも変わらない東アジアの、そして日本の芸術の本質だろう。」(5)と丸山がヨーロッパ芸術に影響を受けながらも日本の芸術の本質を追求している点を指摘している。東洋と西洋の文化の受容を対立させるのではなく止揚した先で作品制作を行う態度がみて取れる。

丸山の商品発表歴は1975年に始まり、今年で45年を迎えるが、その間、ヨーロッパと日本を行き来し、作品が醸成されてきた。丸山の作家活動の半世紀は、1970年と2025年開催予定の2つの日本万国博覧会の間にある。2つの万博に象徴される経済の成長と成熟、それらがもたらす社会のさまざまな問題を丸山は作家活動と並行してみてきた。そして2020年は新型コロナウイルス禍で始まった。社会状況は一変し、今後が見通せない状況が続いている。丸山は個が社会に対してアプローチしていく必要性を問う。我々は何をすべきかと。半世紀を作家活動のひとつの区切りとするならば、本展は先の見えない今後の5年間を照射する位置にあるともいえる。確実に何かが変わり、そして、確実に変わらないものがある。丸山の彫刻はその重力で我々を引き付け、静かに人間の存在について問いかける。

中嶋 実（小海町高原美術館学芸員）

- 1, 3, 4 奥田史郎、道家暢子編「彫刻の《職人》佐藤忠良 写真の人生を語る」草の根出版会、2003年
- 2 「シンビズム3-信州ミュージアムネットワークが選んだ作家たち展」図録、2019年
- 5 「丸山雅秋 存在=関係」図録、2003年



上田市立美術館、シンビズム3-2019年